

## (2)敗戦の詔勅

その頃加藤は考えていた。もはや日本政府は「本土決戦」か「降伏」かの選択しかない。そのどんな小さな兆候でも読みとろうと、目を凝らし、耳をそばだてていた。そして広島・長崎への原爆投下の直後から、新聞の論調が変わっていくのを見逃さなかった。

それまでは「敵を殲滅(せんめつ)する」とか「一億玉砕」とかいていたものが、「皇国護持」(『秋田魁(さきがけ)新報』8月10日)、「国体護持」(『読売報知』8月11日)、「大御心(おおみごころ)を奉戴(ほうたい) 最悪の事態に一億団結」(『朝日新聞』[東京版]8月12日)、「私心を去り国体護持へ」(『毎日新聞』8月13日)というような見出しが紙面に現れてきた。

加藤は敗戦を告げる放送を疎開先の病院で聴いた。にわかには、加藤は天にも昇る気持ちを抑えがたく、歌いだしたい気分になされた。長く待ちに待っていたこの日が、とうとうやって来た。加藤にとって敗戦は二重の解放を意味した。ひとつは、長く重くのしかかっていた「戦争からの解放」だった。もうひとつは、自由を抑圧する「体制からの解放」だった。これで死ななくて済む、生き延びられる。自由も得られる。しかし、何人かの親しい友人たちを戦争によって失ってしまったとい

う悔恨の思いも強く抱いていた。それは戦後になって「サヴァイヴァル・コンプレックス」だといい、「友人を裏切りたくない」という感情となっ



て、加藤の活動、とりわけ反戦の言論、そして九条の会の活動を支えた(写真:敗戦を告げる

『朝日新聞』〈1945年8月15日〉。

敗戦を告げた「玉音放送」は機械の調子が悪く、しかも漢語が多い文章で、聞き取りにくかった。院内でもすべての人がその意味を解したわけではなかった。事態の意味をつかみかねて、事務長は「これはどういうことですか」と院長に尋ねた。「戦争が終わったということだ」と院長は答えた。事務長や職員たちと疎開していた医局員の多くは、沈痛な表情をしていた。しかし、数十人の看護婦たちは、何事もなかったように、屈託のない笑い声を立てて、病室へと戻っていった。皇国主義教育も戦意高揚宣伝も若い娘たちまでは浸透していなかった、と加藤は実感する。